

塩浜学園の先生方と若者たちへのメッセージ（第7弾）

『わかり合える 知ろうとすれば』

塩浜学園の児童生徒の皆さん、初めまして。わたしは北海道の十勝地方にある全校 82 名の小さな学校に勤めています。松井校長先生とは高校時代からの親友でなんでも相談できる間柄です。どちらかといういつも松井先生からはパワーと刺激をもらう一方なのですが、本当に尊敬しています。その松井先生から、私の体験を紹介させてもらう機会をもらいました。



みなさん、いじめってなぜなくなるのか考えたことはありませんか？多分世界中のだれに聞いたって「いじめっていいよね！」「いじめサイコー！」なんて言う人はいませんよね。明らかに悪いことだと誰もが知っているのになくなる。究極のいじめである「戦争」も同じ。誰もが戦争はよくないと知っているのに何千年もなくなりません。

でも私はいじめを一瞬でなくすヒントを、日本から 15000 km離れたある国で見つけました。その国は南アフリカ共和国です。

今から 28 年ほど前まで、アパルトヘイトといって白人は黒人を差別し支配することを国ぐるみで法律を作ってやっていた「いじめ国家」です。ちなみにアパルトヘイト (apartheid) とは、英語で part system、つまり分離させる仕組み、という意味です。建前では“黒人と白人は違うからさ、別々に生きようよ。”ということですが、実際は“金持ちで頭がよくて神様に選ばれた俺たち白人が、汚くて貧乏で知性のない黒人を差別し、こき使ってやろうぜ。”という考えです。白人に虐げられていた黒人たちのリーダーがネルソン・マンデラという人物です。白人はこの人を“オレたちのいじめに抵抗しやがった！”と監獄に閉じ込めます。なんと 27 年間、9000 日もです。

わたしは 10 年前まで、その南アフリカ共和国の日本人学校に勤めていました。南アフリカは長い間国家ぐるみの黒人差別（アパルトヘイト）をしていたひどい国でしたが、28 年前に世界中からの非難に耐えかねてネルソン・マンデラを釈放しました。彼は黒人が国民の 7 割を占めるこの国で初めて行われた全人種での選挙により大統領に選ばれ、差別をしていた人もされていた人も一緒になってどんな人もそれぞれの色で輝ける「虹の国」を目指そうと立ち上がったのです。



わたしはまだ白人と黒人で貧富の差が残るこの国で、日本人学校の子どもたちと黒人居住区の孤児院の子どもたちとの交流を試みました。（それが実現するまでにもたくさん感動的な出来事があったのですが、それはまたの機会に。）

黒人居住区は SOWETO (SOuth WEst TOwnahip) と呼ばれる地域にあり、強盗や殺人が頻発して外国人が入るのはとても危険、とされる地域でした。仲良くなっ

た日本人学校の現地職員がここの住人だった関係で折に触れて訪ねるようになった私は、その過程で SOWETO が危険な場所で住人は強盗や殺人犯だらけ、という聞きかじりの情報に疑問を持ち始めていました。だって出会う人はみんな優しくておおらかで素敵な人ばかりだったからです。その SOWETO に、日本政府なども援助をする公設の孤児院がありました。孤児院とつながりの深い日本大使館の外交官の方を頼りに、日本人学校の子どもたちと孤児院の子どもたちとの交流を計画したのです。日本人学校の子どもたちは治安の問題もあってなかなか現地の子どもたちと交流する機会がありません。家は電気フェンスに守られ、外に出歩くこともできない状況でした。貧しい黒人居住区の、それも孤児と触れ合うなんて考えられませんでした。



わたしは、「アパルトヘイトを乗り越えて白人がしてきた仕打ちを赦そう」と呼びかけたネルソン・マンデラの思いにこたえ、自分たちを虐待してきた白人たちとともに新しい国を作ろうと歩き出した黒人の人々の心を学びたいと思っていました。何より、自分を理解しようとしてくれる人にしか囲まれずに育てられている日本人学校の子どもたちに、あえて何もかも全く自分たちとは違う子どもたちとの交流を通じて、自分をわかってもらう努力・わかり合えたときの喜びを体験させたいと思ったのです。実はここにわたし自身の偏見や思い込みがあったのですが…。

結果を先にお話しすれば、この交流は大成功となりました。わたしが帰国して 10 年たった今でも交流が続いているようで、うれしく思います。しかし、ここでみなさんにお伝えしたいのはその交流の前段階で、わたし自身が自分の持つ偏見と差別意識を乗り越えさせてくれた、ある出会いと体験です。

日本人学校の子どもたちとの交流の計画を理解してもらうため、初めてわたしだけで孤児院を訪ねた時のことです。孤児院の院長先生と打ち合わせをした帰り、孤児たちの生活スペースを通りがかると、そこには年長の孤児たち（15～18 歳）が気だるそうにテーブルに腰かけていてジッとこちらを見ていました。いや、見ているというより、にらんでいる感じでした。

わたしは“貧しいアフリカの、貧しい黒人居住区の、親に捨てられたかわいそうな孤児たちは、きっと心が暗くねじ曲がっているに違いない”と決めつけていました。だからこそ日本人学校のオボッチャマたちにはいい刺激になるだろう、などと考えていました。今思えばなんとひどい考えだったのかと恥ずかしくなりますが、わたし自身が実は自分の差別意識に気が付かない人間だったのです。

わたしをにらむその孤児たちと目を合わせないようにしてさっさと帰ろうと思ったのですが、その時わたしの心に、別の自分のささやきが聞こえてきました。

“日本人学校の子どもに、自分をわかってくれない人に心を開いてもらう努力をしよう、なんて呼びかけているおまえ自身が、ここで彼らの視線から逃げていいのか！”

自分でも不思議ですが、本当にその声が聞こえたのです。ハッとしました。

“勝手に相手の心を想像しているより、わたし自身が望んでいることを相手に伝え、受け入れてもらえるように頑張ろう。日本人学校の子どもたちに教えたかったのはこの勇気じゃないか！”

わたしは拒絶されるかもしれない恐怖を感じながらも勇気をふるって（多分南アフリカ勤務3年間で一番勇気を出した瞬間です）彼らに近づいて話しかけました。するとその中の体の大きな女の子が応えてくれたのです。その子は顔にやけどの跡があり、右手の手首から先がありません。一番視線が厳しく感じられた子でした。

名前を聞くと“シングル。18歳”と教えてくれました。周りの子たちも次々に自己紹介してくれ、わたしは心底ほっとしました。さらに彼女たちと話していくと、決していらんでいたわけでも敵視していたわけでもなかったとわかりました。勝手に“孤児は暗い、ひねくれてる”というイメージを膨らませたわたしの偏見が、彼女たちの視線をそう思わせていたのだと気づきました。勝手な思い込みで恐れていたのです。相手をよく知ろうとせずに、ただ恐れたり疑ったりするところなる、と思い知らされた出来事でした。ネルソン・マンデラが1994年に大統領となり、復讐心に燃える黒人に“白人たちは違いを受け入れることができなかつた。しかし私たちにはそれができる。今、そのことを証明しようではないか！”と訴えます。アパルトヘイトとは、黒人と白人を分断しお互いが交流できなくする仕組みでした。白人は黒人のおおらかな心を知ることができず、黒人は白人をすべて冷血な支配者と決めつける。



まさにマンデラの言う通り、『知らないから恐れるのだ。知ろうとしないから分かり合えないのだ』。わたしは本当にそうだ、と心から思いました。この時仲良くなったシングルはじめ年長の孤児たちは、こののちわたしの気持ちを理解して積極的に交流を助けてくれ、年下の孤児たちのまとめ役になってくれました。日本人学校で子どもたちが組体操をやりたいと言い出した時にはシングルが若い孤児たちをテキパキとグループ分けしてくれ、自分は不自由な右手でピラミッドの土台を買って出てくれました。

交流のまとめのため日本人の子どもにメッセージを頼むと、こちらの目を真っすぐ見てこう言いました。

“自分自身を信じなさい。勇気をもって生きなさい。勉強して人の役に立つ人間になりなさい。”

わたしはここでも自分の偏見に気づかされて頭を殴られたような感覚を味わいました。

“シングルは赤ちゃんのときの虐待で受けた顔のやけど（お母さんから熱湯をかけられたそうです）や手首の障害に悩み、自分に自信がないまま生きていくかわいそうな娘”と無意識に思いこんでいたからです。でも彼女はそうではなかつた。自分の生い立ちに臆することなく自信をもって生きていく。心が震えました。恵まれない環境の中でも輝く笑顔で生きる子たちが、アフリカにはたくさんいるのです。

マンデラが大統領になり、支配権が黒人に移ったとき、白人は黒人の復讐を恐れました。もちろん黒人はそれまでに虐待されて殺された親族を思い、白人に仕返ししようとしていました。その時にマンデラは復讐に燃える黒人たちを前に、“やられたから、とやり返せば、やり返された方はそれを恨みに思ってまたやり返してくる。復讐の連鎖だ。これを止めるには誰かが『やられたけれどやり返さない』という勇気をもって決断しなければならない。それを今私たちひとりひとりが行おうではないか！”と呼びかけました。そして本当にわかり合うために、思っていることをすべて伝える真実委員会という取り組みを始めます。親族を殺された黒人が、それを行った白人に面と向かって直接謝罪を訴えるのです。もし白人が罪を認め謝罪すればその罪には問われません。そのかわり、黒人側は殺された親族をどれだけ愛していたか、殺したお前をどれだけ恨んでいるのか、すべてをぶつけることができました。それを何万回も実施しました。



お互いの思いをぶつけあい、やっとお互いを受け入れることができる。周りの目を気にして自分を隠しながら作り笑顔で付き合っても、本当に理解し合うことはできないのかも知れませんが、南アフリカはそうやって憎しみの連鎖を断ち切ろうとした国なのです。

わたしがシシゲルといい友だちになれたのは、勇気をもって自分の思いを相手に伝えたからだと思っています。彼女がどう思うか、どう行動するかはわたしには変えられません。でもわたし自身の行動はわたしが決めることができます。わたしは彼女のことが知りたい、友だちになりたい、と思い、それを伝えようと勇気をふるって行動しました。

あなた1人では学級の誰かのいじめを止めることはできないかもしれませんが、自分がいじめに加担しないと決めることはできます。決めたら行動することもできます。そう思う人があなたの隣にもいるかもしれない…。そしてその隣にももしかすると…。いつかいじめのない学級ができ、いじめのない学校ができ、いじめのない日本ができ、ついには戦争のない世界を作れるかもしれません。あなたがあなたの心を自分で決められるのなら、可能性はゼロではないのです。

まずあなたが今からどう思い、どう決断し、どう行動するか。わたしはみなさんの顔を知りませんが、松井校長先生とともに素晴らしい塩浜学園を作っていくみなさんの笑顔はすでにわたしの心の中に広がっていますよ。世界（世の中）にはいろいろな人がいます。もし学級で、学校で、孤独を感じるものがあったら、広い広い世界の中のどこかに、自分をわかってくれる人がいると思ってください。

「わかり合える 知ろうとすれば」

あなたが自分の今いる場所からほんのちょっと外を見渡す気持ちになれば、そしてあなたが相手をよく知ろうと興味を持てば、遠いアフリカの人とだって仲良くなれるのです。

